

平櫛田中コレクション 2010 The Collection of Denchu Hirakushi (2010年10月26日-11月7日 東京藝術大学 正木記念館1F)					
1		浴女試作 Study for Bathing Woman	石井鶴三 ISHII, Tsuruzo	大正15年 (1926) ブロンズ bronze	全高36.5 cm
2		童子小像 Small Statue of a Child	大内青圃 OUCHI, Seiho	昭和12年 (1937) 木 wood	高12.3 cm
3		行商 Itinerant Merchant	大橋敏男 OHASHI, Toshio	昭和24年 (1949) 木 wood	全高23.7 cm
4		田中像 Statue of Hirakushi Denchu	喜多武四郎 KITA, Takeshiro	昭和9年 (1934) ブロンズ bronze	全高38.2 cm
5		鷹 (飛習作) Hawk (Study)	佐藤朝山 SATO, Chozan	昭和6年 (1931) 木 wood	高18.9 cm
6		伝書鳩 Carrier Pigeon	菅原安男 SUGAWARA, Yasuo	昭和25以前 (before 1950) 木 彩色 color on wood	高18.9 cm
7		金鷲 Golden Kite	竹内久一 TAKENOUCHI, Kyuichi	明治40年頃 (c.1907) 木 彩色 color on wood	高7.7 cm
8		久米舞 Kumemai Dance	竹内久一 TAKENOUCHI, Kyuichi	明治-大正時代 (Meiji-Taisho era) 木 彩色 color on wood	総高33.0 cm 像高26.8 cm
9		ねこ Cat	辻晋堂 TSUJI, Shindo	昭和31年 (1956) 陶彫 ceramic sculpture	高26.7 cm
10		老人 (墓守) Old Man (Grave Keeper)	中原悌二郎 NAKAHARA, Teijiro	大正5年 (1916) ブロンズ bronze	高60.0 cm
11		幼少の孟子像 Mencius in His Childhood	橋本平八 HASHIMOTO, Heihachi	昭和6年 (1931) 木 wood	全高26.0 cm
12		良寛 Ryokan	橋本平八 HASHIMOTO, Heihachi	昭和9年 (1934) 木 wood	高27.4 cm
13		転生 Reincarnation	平櫛田中 HIRAKUSHI, Denchu	大正9年 (1920) 木 彩色 color on wood	総高239.3 cm 台座-頭頂の全高196.5 cm
14		島守 Island Keeper (Portrait of an Old Man at Tabata)	平櫛田中 HIRAKUSHI, Denchu	昭和18年 (1943) 木 wood	全高71.5 cm
15		霊亀 Spiritual Turtle	平櫛田中 HIRAKUSHI, Denchu	昭和24年 (1949) 木 彩色 color on wood	全高48.2 cm
16		平安老母 The Aged Mother of Heian (Portrait of Okada Ume of Heiando)	平櫛田中 HIRAKUSHI, Denchu	昭和11年 (1936) 木 彩色 color on wood	全高34.7 cm
17		禾山笑 Priest Kazan Laughing	平櫛田中 HIRAKUSHI, Denchu	大正3年 (1914) 木 wood	全高77.0 cm
18		兎 Rabbit	藤川勇造 FUJIKAWA, Yuzo	明治43年 (1910) ブロンズ bronze	高15.2 cm
19		ミスター・ボース (印度人の首) Mr. Bose	藤川勇造 FUJIKAWA, Yuzo	昭和7年 (1932) ブロンズ bronze	高47.5 cm
20		老婆 Old Woman	堀進二 HORI, Shinji	大正4年 (1915) ブロンズ bronze	高38.0 cm
21		兎 Rabbit	牧雅雄 MAKI, Masao	— ブロンズ bronze	高8.1 cm
22		平櫛先生像 Statue of Hirakushi-sensei	宮本理三郎 MIYAMOTO, Risaburo	昭和16年 (1941) 木 wood	全高25.0 cm
23		鳩 Dove	宮本理三郎 MIYAMOTO, Risaburo	昭和11年 (1936) 木 wood	高10.2 cm
24		犢 Calf	宮本理三郎 MIYAMOTO, Risaburo	昭和25年以前 (before 1950) 木 wood	全高11.5cm
25		茄子 Eggplant	宮本理三郎 MIYAMOTO, Risaburo	昭和25年以前 (before 1950) 木 wood	高6.3 cm
26		海幸 Fruit of the Sea	宮本理三郎 MIYAMOTO, Risaburo	昭和9年頃 (c.1934) 木 彩色 color on wood	長28.0 cm
27		海幸 Fruit of the Sea	宮本理三郎 MIYAMOTO, Risaburo	昭和9年頃 (c.1934) 木 彩色 color on wood	長28.9 cm
28		海幸 Fruit of the Sea	宮本理三郎 MIYAMOTO, Risaburo	昭和9年頃 (c.1934) 木 彩色 color on wood	長18.4 cm
29		海幸 Fruit of the Sea	宮本理三郎 MIYAMOTO, Risaburo	昭和9年頃 (c.1934) 木 彩色 color on wood	長12.3 cm
30		黒猩猩 Chimpanzee	宮本理三郎 MIYAMOTO, Risaburo	昭和23年 (1948) 木 彩色 color on wood	全高16.5 cm
31		蛙 I Frog I	宮本理三郎 MIYAMOTO, Risaburo	昭和25年以前 (before 1950) 木 彩色 color on wood	全高3.6 cm
32		蛙 II Frog II	宮本理三郎 MIYAMOTO, Risaburo	昭和9年 (1934) 木 彩色 color on wood	全高3.3 cm
33		なまず (模刻) Catfish (Copy)	宮本理三郎 MIYAMOTO, Risaburo	昭和25年以前 (before 1950) 木 彩色 color on wood	高5.0 cm 長50.5 cm
34		象 Elephant	森川杜園 MORIKAWA, Toen	— ヒノキ材製 wood (Japanese cypress)	高6.6 cm
35		狂言釣狐 (根付) Kyogen Play Tsurigitsune (Netsuke)	森川杜園 MORIKAWA, Toen	— ヒノキ材製 彩色 color on wood (Japanese cypress)	高11.9 cm
36		鮭 Salmon	森川杜園 MORIKAWA, Toen	— ヒノキ材製 彩色 color on wood (Japanese cypress)	長11.9 cm
37		鳩 Dove	森川杜園 MORIKAWA, Toen	— ヒノキ材製 wood (Japanese cypress)	高3.4 cm
38		小供 Child	山本豊市 YAMAMOTO, Toyoichi	昭和9年 (1934) ブロンズ bronze	全高39.0 cm
39		翡翠 Kingfisher	吉田白嶺 YOSHIDA, Hakurei	— ブロンズ bronze	全高8.4 cm
40		岩雲雀 Alpine Accentor	吉田白嶺 YOSHIDA, Hakurei	— 木 wood	全高13.6 cm
41		鶴の子 Fledgling Cranes	米原雲海 YONEHARA, Unkai	— 木 wood	高5.4 cm
42		木の精 Tree Spirit	エミール・アントワーン・ブールデル Émile Antoine Bourdelle	1929 ブロンズ bronze	全高28.7 cm
43		少女の首 Head of a Girl	オーギュスト・ロダン Auguste Rodin	— ブロンズ bronze	高10.9 cm
44		裸婦坐像 Seated Female Nude	アリスティド・マイヨール Aristide Maillol	— ブロンズ bronze	高18.4 cm

作家解説

					宮本理三郎 <p>1904-1998</p>
石井鶴三 <p>1887-1973</p>	東京生まれ。小山正太郎に洋画、加藤景雲に木彫を学ぶ。東京美術学校卒業後、日本美術院研究所で田中、佐藤朝山、中原悌二郎らと塑造の研究に励んだ。1944年東京美術学校教授、1950年日本芸術院会員。1960年相撲博物館館長。彫刻の他にも油彩画、水彩画、版画や新聞小説の挿絵なども行った。	辻晋堂 <p>1910-1981</p>	鳥取生まれ。1931年に上京して独立美術研究所で素描を学ぶが、1933年の第20回院展に《千家元麿氏像》が入選し、木彫に転じる。田中が「人材欠乏の木彫界の将来辻をおいて他に期待すべき木彫人はない」と大きな期待を寄せていた作家であったが、戦後はあまり木彫を作らなくなり、制作の大半を陶彫に移し、抽象的な形態へと向かっていった。晩年の田中が好んで揮毫した言葉に「いまやらねばいつできる　わしがやらねばたれがやる」というものがあるが、これは、田中が辻の工房を訪れた際に、壁に貼られていたこの自警文に感銘を受けて自身も使うようになった文である。《ねこ》は1966年、一番最後に田中コレクションの中へと加わった作品である。	森川杜園 <p>1820-1894</p>	奈良生まれ。内藤其淵に絵画を学ぶ。柴田是真の勧めにより奈良一刀彫を始め、春日大社等の仕事に従事するとともに、数多くの仏像や社寺の宝物の模造を行った。優れた彩色技術は田中に影響を与えた。田中は戦前から森川杜園の作品を熱心に蒐集しており、田中コレクションの中には5点所蔵される。狂言においても高い技能を有し、しばしば彫刻の題材に用いている。
大内青圃 <p>1887-1973</p>	東京生まれ。父は仏教学者大内青巒。東京美術学校に入学し、高村光雲に木彫を、水谷鉄也に塑造を学ぶ。1927年日本美術院同人。生涯仏像彫刻を作り、仏彫に新しい一面を切り開いた。「自分については余り語るのを好まない大内君は黙々として制作に精進しその帰結を求めて作品に語らせ独自の境地を開拓してきた作家である。」と田中談にある。	中原悌二郎 <p>1888-1921</p>	北海道生まれ。はじめ洋画を学んでいたが、ロダンと萩原守衛の影響で彫刻へと転向し、日本美術院に参加する。田中は中原を次のように評している。「君は一見直情勁行で、物に拘泥しない超越的な所があつた。習作する態度は極めて眞摯なるもので、一度後ろに下がって、じりゞゝ前にすすんで土をつける様子は、剣を執つて敵に向つた感じであつた。」代表作としては《老人（墓守）》が挙げられる。寡作であり、気に入らない作品は自ら壊したため、現存する作品が極めて少ない。	山本豊市 <p>1899-1987</p>	東京生まれ。中学卒業後、戸張孤雁に師事。1918年、太平洋画会研究所に入り、彫刻と素描を学ぶ。1924年渡仏してマイヨールに師事し、4年間過ごす。帰国後は仏像への関心を深め、1930年代には乾漆技法を研究する。1949年東京藝術大学講師、1953年に教授に就任し、多くの学生を指導した。田中コレクション中、山本豊市の作品は7点ある。
大橋敏男 <p>1882-?</p>	京都生まれ。東京工業大学卒業後、田中に師事。1917年、日本美術院の院友に推挙される。日本美術院展に出品された作品はほぼ全て一本の木片から削り出し制作されている。大橋の作品はノミ跡の荒々しさと木の素材感が際立つ。しかし、中にはある出来事を捉え表現する繊細な力が宿っている。《行商》は一見木の素材感に眼を奪われるが、砥子が降り積もる雪を表現していることに気が付くと、雪の中に行む行商が現れる。つまり、木片からある雪の日の出来事への転換をこの作品は遂げる。近代という時代に埋もれてしまったすぐれた作家の一人である。	橋本平八 <p>1897 - 1935</p>	三重生まれ。郷里の三宅正直に学んだのち、佐藤朝山に師事した。1922年日本美術院の研究会員、1927年同人となる。将来を期待されていたが、1935年脳溢血のため38歳で早逝。田中と橋本は子弟の関係にはないが、田中は自分より25歳も年少だった橋本の才能を愛し、生前から作品を購入していた。本学が所蔵する橋本の作品14点は、全て田中が寄贈したものである。また橋本の没後、実弟で前衛詩人の北園克衛の編集により『純粋彫刻論』（昭森社、1942年）が刊行された際には、田中がその序文を書いている。	吉田白嶺 <p>1871-1942</p>	東京生まれ。四条派の飯島光峨に日本画を学んだが、実弟の彫刻家吉田芳明の活躍に触発されて彫刻を志し、月谷初子に彫塑の指導を受けた。岡倉天心の創設した日本彫刻会に参加したのち、1914年、日本美術院彫刻部に加わり、同人となる。山本鼎の農民美術運動に協力し、生活と彫刻との関係を追求した。小禽類の精緻な作品を数多く残す。埴輪や乾漆技法の研究も行った。
喜多武四郎 <p>1897 - 1970</p>	東京生まれ。戸張孤雁に師事。1920年日本美術院の研究会員となり、石井鶴三の指導を受ける。1921年院友、1927年同人となる。美術院彫塑部の解散後は、日本画府彫塑部会員に迎えられた。一貫して人体をモチーフにした制作を行い、一切の余計を排した造形性を獲得した。橋本平八の『純粋彫刻論』で、田中に続いて序文を書いている。	平櫛田中 <p>1872-1979</p>	岡山生まれ。はじめ大阪で人形師の中谷省古に彫刻の手ほどきを受けた後、上京し高村光雲の門下生となって木彫を学ぶ。1898年、湯島の麟祥院で西山禾山が臨済録について語るのを聞き、その後の思想形成、制作のモチーフなどに大きな影響を受ける。1908年、日本彫刻会第1回展に《活人箭》を出品し、岡倉天心の推奨を受ける。再興院展にて精力的に作品を発表し続け、1944年より東京美術学校彫刻科木彫部教授となって後進の指導を行う。1950年、自作も含めた所蔵の彫刻作品を本学へ寄贈。その後も寄贈を続け、現在田中コレクションは計148点に及んでいる。100歳の誕生日に約30年分の木材を買い込むというエピソードから類推できるように最期まで旺盛な制作意欲が衰えることはなかった。	米原雲海 <p>1869-1925</p>	島根生まれ。建築彫刻を学んだ後、上京し高村光雲に師事。高村光太郎の指導を任されるほどの木彫技術をもっていた。また、西洋で大理石彫刻を制作する際に用いる「星取り法」をいち早く木彫制作に持ちこむという革命を起こした。1895-1897年東京美術学校勤務。岡倉天心をリーダーとした日本彫刻会のメンバーでもあった。田中は米原に制作の方法を教わった。
佐藤朝山 <p>1888-1963</p>	福島生まれ。代々宮彫師をつとめた家に育ち、幼時より父や叔父に彫技を学んだ。1904年、上京して山崎朝雲に師事。1914年、日本美術院に加わり、同年に同人となる。1922年渡仏し、プールデルに師事した。帰国後は洋風彫塑と日本の伝統を踏まえた作品を発表する。のちに師の朝雲と不和になったことから、師からもらった朝山の号を返上し、本名の清蔵、続いて玄々と名乗った。	藤川勇造 <p>1883-1935</p>	香川生まれ。1908年東京美術学校彫刻科を卒業し、農務省海外練習生として渡仏。翌年、アカデミー・ジュリアンのジャン＝ポール・ローランス教室に通う。その後、ロダンの助手を務め、帰国後は二科会会員となって活動した。代表作の《Mr. ポース》は新宿中村屋の長女相馬俊子と結婚したインド独立運動家の青年ラス・ビハリ・ポースをモデルにした作品である。	オーギュスト・ロダン <p>1840-1917</p>	パリ生まれ。パリの帝国素描算術学校で美術の基礎を学ぶが、エコール・デ・ボザールの試験に3度失敗して断念し、室内装飾の仕事などに携わる。1876年《青銅時代》が大きな反響を呼び、1880年《地獄の門》の制作を国から依頼されてから、ようやく彫刻家として認められる。以後、革新的な実験や大胆な造形力は近代彫刻の出発点となった。田中は指導方針として学生たちに実制作ばかりでなく、優れた作品を見ることを勧めており、教材として自分のコレクションから教室に作品を持ち込むことがあったが、ロダン、マイヨール、プールデルの作品も学生たちの参考となる機会があった。
菅原安男 <p>1905-2001</p>	奈良生まれ。1923年東京美術学校彫刻科に入学。高村光雲、関野聖雲に木彫を学ぶ。関東大震災に罹災後は田中宅に寄寓を許されて通学した時期もあった。卒業後、奈良美術院にて文化財の修復に従事。1941年に日本美術院の院友、その後新制作の会員となる。1944年より東京美術学校助教授、1969年より教授。木彫のほか塑造の作品も数多く、仏教彫刻から写実性のある肖像や動物彫刻まで幅広い作風を示した。	堀進二 <p>1890-1978</p>	東京生まれ。太平洋画会に入会し、新海竹太郎に学ぶ。1916年、日本美術院研究所に通い、中原悌二郎、保田龍門らと互いにモデルになり研究に励む。《老婆》は第12回文展において特選を獲得した作品である。	エミール・アントアヌ・プールデル <p>1861-1929</p>	フランスのモントーバン生まれ。トゥールーズの美術学校に学んだ後、1884年パリのエコール・デ・ボザールに進むが、学校に失望して退学する。1893年、32才でロダンの助手となり、15年間ロダンの仕事を手伝う。その後はロダンを離れ、構築性のある作風を展開した。
竹内久一 <p>1857-1916</p>	江戸生まれ。堀内龍仙、川本州楽に牙彫を学ぶ。1880年、歎古美術会で古仏に感銘し木彫家を志す。1888年より東京美術学校彫刻科に務め、没するまで任を全うした。代表作としては、1893年シカゴ万国博覧会に出品した《伎芸天》や《神武天皇像》（両者とも本学所蔵）などがある。田中は「一に久一、二がなくて、三に杜園」と語ったことがあり、高く評価していた。	牧雅雄 <p>1888-1935</p>	神奈川生まれ。はじめ、太平洋画会研究所で絵画を学び、後に彫刻へ転向。1924年日本美術院メンバー、27年同人となる。主として彫塑を制作したが木彫も秀作を残している。	アリスティド・マイヨール <p>1861-1944</p>	フランスのパニユルス＝シュル＝メール生まれ。画家を志して1885年パリのエコール・デ・ボザールに入学、ナビ派のグループと交わり、同年齢のプールデルとも親交を結ぶ。タピスリー制作に熱中するが視力を害して彫刻制作に転じた。ゴッヤンの影響を受け、明快な構成で、生命力あふれる裸婦像を数多く制作した。

^[*] 『平櫛田中 次世代に遺した珠玉の彫刻』小平市平櫛田中彫刻美術館 (2009)を主に参照した。解説内の田中の言葉はこの図録からの引用である。